

Letter No. 37

雪崩分科会レター



中国天山の雪崩。コルラ-イリ間の国道 218 号は雪崩地帯を通過する。この雪崩はナラト付近で発生したもので、道路にはかろうじてとどいていない。デブリの最大幅 17m, 最大厚さ 1.45m, スノーボールの直径 8-20cm. スノーボール内の雪密度 540kg/m^3 . (2005 年 2 月阿部修会員撮影)

2006年10月31日発行

(社) 日本雪氷学会 雪崩分科会

目 次

■ 2006年度雪崩分科会例会のご案内	1
■ 2005年度事業報告	2
■ 2006年度事業計画(案)	2
■ 2005年度会計報告	3
■ 2006年度予算(案)	3
■ 第10回全国山岳・スキー場雪崩安全セミナー開催報告	4
■ 第17回 雪崩対策の基礎技術研修会開催のお知らせ	7
■ 雪崩特集号について(第2報)	8
■ 分科会費納入のお願い	9
■ 雪崩分科会役員	10

雪崩分科会レターのメール配信をご利用下さい

経費（郵送料）の節減と編集・配送作業の軽減のため、35号より郵送による配信に代わって、電子メールによる雪崩分科会レターの配信を始めました。

メール配信をご希望の方は、編集担当の荒川（h.arakawa@yagai.co.jp）まで、メールにてご連絡下さい。また、途中でメールアドレスが変更になった場合にはできるだけ早くご連絡下さい。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

編集担当 荒川逸人

■ 2006年度雪崩分科会例会のご案内

2006年度日本雪氷学会全国大会（秋田大会）の会期中に、下記のとおり雪崩分科会例会（総会、研究会）を開催いたしますので、ご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

1. 日時：2006年11月16日（木） 18：00～20：00
 2. 場所：秋田市民交流プラザ ALVE(アルヴェ) 2階 多目的ホールA
(秋田市東通仲町4番1号)
 3. 総会（18：00～18：40）
 - ・役員改選
 - ・2005年度事業報告
 - ・2006年度事業計画（案）
 - ・2005年度会計報告
 - ・2006年度予算（案）
 - ・その他
 4. 研究会（18：40～20：00）
 - 講演者：平島 寛行 氏（防災科学技術研究所 雪氷防災研究センター）
 - 題目： 「ISSW2006の報告」
 - 講演者：窪 敏秀 氏（国土交通省東北地方整備局 山形河川国道事務所）
 - 題目： 「平成18年豪雪時の山形県内の国道における道路管理について」
 - 講演者：飯倉 茂弘 氏（鉄道総合技術研究所 防災技術研究部）
 - 題目： 「雪崩による鉄道の運行障害2006」
- 雪崩分科会会員以外の方のご参加も大歓迎です。
 - 例会終了後、懇親会を予定しております。場所は例会時にお知らせします。



■ 2005年度事業報告

1. 総会・研究会の開催（2005年9月27日 旭川市 講演：3件 参加者：33名）
2. 雪氷学会主催「第16回雪崩対策の基礎技術研修会」開催協力（新潟県湯沢町 参加者：34名）
3. ニュースレターNo.35, 36の刊行
4. 企画研究に対する助成（企画研究助成1件）
助成対象者：伊藤陽一会員（北海道大学低温科学研究所）
研究題目：多量の降雪にともなう雪崩発生時の積雪連続観測
5. ホームページの更新と管理
6. 雪崩分科会メーリングリストの運営と管理

■ 2006年度事業計画(案)

1. 総会の開催
2. 研究会の開催
3. ニュースレター刊行（2回）
4. 第17回雪崩対策基礎技術研修会の開催協力
5. 分科会会員に対する研究協力
6. 雪崩対策の基礎技術研修会テキストの更新
7. 「雪氷」の雪崩特集号発行に対する協力
8. ホームページの充実と活用
9. メーリングリストの活用

■ 2005年度会計報告

(収入の部)

科 目	2005年度決算
1. 基本財産運用収入	-
2. 会費収入	40,000
3. 事業収入	180,000
4. 助成金	-
5. 内部移管勘定	109,622
6. 資産勘定からの繰入	-
7. 雑収入	34
当期収入合計 a	329,656
前期繰越収支差額	1,413,274
収入合計 b	1,742,930

(支出の部)

科 目	2005年度決算
1. 事業支出	284,266
2. 管理費	273,200
3. 内部移管勘定	-
4. 資産勘定への繰入	900,000
5. 予備費	-
当期支出合計 c	1,457,466
当期収支差額 a - c	-1,127,810
次期繰越収支差額 b - c	285,464

■ 2006年度予算(案)

(収入の部)

科 目	2006年度予算
1. 基本財産運用収入	-
2. 会費収入	65,000
3. 事業収入	50,000
4. 助成金	-
5. 内部移管勘定	50,000
6. 資産勘定からの繰入	-
7. 雑収入	1,000
当期収入合計 a	166,000
前期繰越収支差額	286,154
収入合計 b	452,154

(支出の部)

科 目	2006年度予算
1. 事業支出	260,000
2. 管理費	150,000
3. 内部移管勘定	300,000
4. 資産勘定への繰入	-
5. 予備費	-
当期支出合計 c	710,000
当期収支差額 a - c	-544,000
次期繰越収支差額 b - c	-257,846

【注意】繰越金額が決算と予算(案)で異なるのは、予算(案)を雪氷学会事務局に提出する日程の関係で、予算(案)を決算前に組む必要があり、繰越額を見込みで計上するためです。雪氷学会事務局へ提出した予算(案)と整合性を取るためとご理解下さい。

■ 第10回全国山岳・スキー場雪崩安全セミナー開催報告

2006.9.4 中山 建生

(社)日本雪氷学会雪崩分科会主催の「第10回全国山岳・スキー場雪崩安全セミナー」を9月3日午前10時より16時30分、京都市内ハートピア京都にて参加者32名で開催しましたので報告します。

2006年度は山岳でも、スキー場でも雪崩が数多く発生し、多くの人たちが事故に関心を寄せ、雪崩、救助や捜索に関する研修会に参加をしました。山岳での事故の特徴として共通したことはある程度雪崩の危険の認識はあっても事故を他人事として受けとめていた点でした。それは雪崩学習に取り組まないまま登山をしたこと、雪崩ビーコンを持っていても実際に使えなかったことから練習をしていなかったものと判断しました。

ここ数年、研修会や講習会の安全実施が疎かにされ、準備や点検が不足したため講習の目的が達成できない、講師も適切な指導ができず漫然とした取り組みとなっていることが問題とされました。こうした問題に関して教訓を生かすこと、そして講習会に関心をもつ人たちが広い視野に立って雪崩教育全体を見なおす機会となるよう願ってセミナーの開催としました。

若林隆三先生から分科会を代表して、「雪崩事故の防止には事故の原因を明らかにしてこれを解決するというのが欧米の専門家の仕事です。彼らは事故の調査をして訴訟の判断材料を提供します。こうした社会的な責任をもつ活動をし、未然に事故の防止ができるよう努力しています。今日は皆さんが関心を持つ法的な責任とGPSの積極的な活用で事故防止がはかれることについて報告をしてもらいます。京都が私の育った場所、ここでセミナーの開催ができたこと、一日皆さんとともに勉強したいと思えます」と参加者に挨拶をしました。

午前中の報告は、雪崩教育の現場から、そして今年受講したいとする人からの要望や期待を話してもらい、報告に関して会場からの質問と意見を重ねました。

田原裕氏は「みな雪崩の勉強はしている。しかし、肝心の登山者としての自覚がないため、雪崩教育は砂上の楼閣になっている」と。片桐時乃氏は「自らの雪崩体験から学習を始めたが学習した成果を生かす場所がない。登りたいとする人たちからは面倒なこと、難しいなどと敬遠される。そうしたことから分かりやすい教育、講師と生徒が作り出す講習を進めたいと思う」と。今立由美子氏からは「若い新人に期待している。リーダークラスは頑迷で関心を持たない。おっちゃんには期待できない。新しい世代のために雪崩教育を分かりやすいものにしたい」といずれも今の雪崩教育を改善して、講師としての能力を高め、だれもが理解する、面白いと思わせる内容にしたいとの意見でした。自らの課題としていると悩みを語りました。

今年雪崩講習会に参加する生徒を代表して小倉氏は「雪崩のこと、独習するのが難しい。未知のものに興味はあっても難しいという印象が障害となった。会のレベルなど身近な教育の機会を作ってほしい」と指摘しました。何年か学習し教育体験をすると、講師は習ったことの全てを教えようとしています。また当然知っているという前提でものごとを進める傾向にもあります。現実はそのため生徒は振り回されているのです。会場からは現場の要求がノウハウを求めたり、即決の解決を求めるため、きちっと学習したり訓練をすることを等閑にしているから力がつかないと不安を投げ掛けました。今後の講習会の持ち方や講師の質的な向上など自ら

の課題としているが思うように進まないという悩みを語りました。また、ビーコンは高価で自分では購入していない、それでなかなか使えるようにならない。事故が起きればパニックとなり正常な判断を求めにくいなど現実の問題点や矛盾が報告され解決は単純ではないことを知らされました。

進行役を勤めた中山から、1987年に五竜とおみで初めて雪崩講習会を開いたときも同じような問題があったこと。近年引き起こされる事故も雪崩の高度な知識や判断能力がなくては避けられなかったものでなく、気象の変化、降雪量、地形など従前の経験や知識でも十分に危険の認識は持っていたのにこれを怠り、漫然とした行為、準備のなさ、自信過剰など随所に問題点が指摘できるものであったことを話しました。今年の事故から、自分は事故を起こさないとか危険なルートにははまらないと決めてかかって、雪崩のことを勉強しない、ルートの下調べをしない、天候に注意を払わないというものでした。過去に私が直接話を聞いた時、山に登っていればいつか事故に遭う、雪崩が恐くて山に行けるかと開き直ってしまうのです。事故からの教訓を得るということに真剣になれない、つまり友達を大切にするという気持ちがとても薄いのです。田原氏の指摘はこうしたことをも意味していました。

午後からは五竜とおみ、大日岳の裁判の主任弁護士を勤めた松本の中島嘉尚先生から講師や主催者に過失があれば刑事、民事上の責任を問われるという話をしてもらいました。裁判は社会的な常識によって裁かれるのでいわゆる登山の専門家の考え方ではないことに注意してほしいと始まり、具体的には事前の下調べや打ち合せをすること、雪崩の危険を判定する学習をすること、危険を回避する手立てを用意して講習会を開くことが必要であること。五竜の事故でも大日岳の事故でもこれらを怠り、過去の経験と慣れに頼って漫然として講習に取り組んだためと指摘しました。

国や県の講習会でなくても、つまり私たちのような山岳会や連盟でも必要な準備や注意を払って行なわなくてはならないこと。研修会、講習会は安全に実施することが求められているため主催者や講師は適切な注意を払い、点検と事故防止のための対策を取らなくてはならないものと考えて開催してほしいと話されました。

会場からは埋没体験や雪庇の観察に不安を感じたのか、そうしたことはしていけないのかと質問が出ました。講習目的に照らして安全実施のために、事故を起こさない手立てを取ることの良いとされ、慣れから漫然として説明もなく対策もないまま行なわないようにと注意を受けました。登山に関わる法的な問題や指導者の責任など常識的に考えれば当然の答えがだせるにも関わらず、いつの間にか登山者の身勝手な理屈、責任を回避するための方便に染まっています。欧米では事故の原因を明らかにする中で登山者の身勝手な主張や専門馬鹿を恥ずかしいことだと指摘しています。まだまだ研修会の持ち方や指導者の養成、研修など私たちにたくさんの課題があることを知らされました。

続いて高橋玉樹氏にGPSについての最新の情報と事故防止に活用する話をしてもらいました。最近のGPSの能力は誤差が2～5mの範囲で実用にはまったく問題のないこと、稜線の特定や雪庇の張り出しの危険を避けるためにも有効であることなど、実際にパソコンを動かして分かりやすく実演してくれました。ビーコンの普及のときもそうであったように、良いからといって直ぐに購入して利用されるわけではありませんでした。何回も練習して使えるようになって初めて有用さを実感したからです。実際に使うためには実践的な野外実習が必要です。頭のなかでいじっていても使えるようにはならないからです。彼の報告からGPSに関心を持つことになりました。会場からも何人かがGPSを利用しており関心の高いことが分かりました。雪崩教育のなかにも取り入れたいと考えています。

セミナーに参加された泉康子氏に飛び入り発言を求めました。常念岳一の沢事故を体験して

「いまだ下山せず」の著者でもあり、当時のせつない思いと仲間がどこにいるのかを突き止める活動の一端を話し、苦悩や悲しみをいまでも感じさせる言葉に胸の痛む思いをしました。事故の原因を突き止めることが自らの責任であり、対策が取れるとする彼女の決意に水を差すような発言があったことを報告しました。今、会場からの報告を聞いて同じように考えている登山者、山岳会の指導者がいることに山岳の世界の閉鎖性と身勝手さを噛み締めていました。神戸大学でワングルの顧問をされていた真方氏は大日岳事故に関わり、登山者は真相解明に初め消極的であった。事故の防止を願い真剣に努力することを訴えて、その気持ちが伝わり、兵庫の人たちに頑張ってもらっていると報告しました。

こうした報告を聞いていると雪崩安全セミナーは専門家の知識や能力を実際に必要とする人たちに生かし、また登山やスキーをする人たちは自らの要求や課題をぶつけることでお互いに磨き合えるものと考えました。参加者には5月の事故、気象データからの分析、雪崩判断のチェックリスト、捜索救助活動へのチェックリスト、そして学会入会案内などを交付しました。

会場手配や現地の準備を進めていただいた近畿ブロックの横井功氏に感謝して、セミナーの開催を終了しました。準備期間の短いなかで事故の直接報告者が確保できずで予定の一部を変更したことをお詫びしました。

終了後事務局スタッフと若林隆三先生、中山等がセミナーのまとめを自由歓談で行ない、参加者が同じ目線で話ができたと、講師の話も具体的で分かりやすかったことなどで良かったとされましたが、準備や広報が十分でなかったことを反省しました。

以上

記

セミナー報告

主催者挨拶 若林 隆三 10時15分から
司会進行 中山 建生

雪崩教育の現状と期待するもの 報告者 田原 裕 片桐 詩乃 今立由美子
小倉

12時 休憩

報告 雪崩裁判で問われる主催者、講師の責任 弁護士 中島 嘉尚 氏

報告 GPSの活用 機能と利用のしかた 高橋 玉樹 氏

会場からの発言 常念岳一の沢雪崩事故を振り返って 泉 康子 氏
大日岳事故の真相を求めて 真方 忠道 氏

閉会挨拶 中山

16時30分

会場 京都市 ハートピア京都会議室
事務局 近畿ブロック雪崩講習会 横井 功ほか2名
参加費 1000円

■ 第17回 雪崩対策の基礎技術研修会開催のお知らせ

1) 開催の趣旨

「平成 18 年豪雪」では、積雪寒冷地において雪崩による通行止めが発生し、地域社会の経済活動、市民生活に大きな障害を与えました。(社)日本雪氷学会では、平成 2 年度から、雪崩対策の前線で活躍のスキー場パトロール、山岳救助担当者、雪崩対策に関わるコンサルタント、諸官庁の関係者を対象に、雪崩対策の基礎技術研修会を開催してきました。今回は、はじめて北海道で開催いたします。これまでの研修会プログラムを一部変更し、北海道の講師を中心として、道路の雪崩対策を中心に、最低限必要な知識の習得を目指します。

2) 開催月日

平成 18 年 12 月 18 日 (月) ~19 日 (火)

3) 会場

室内講義：(株) ドーコン (札幌市厚別区厚別中央 1 条 5 丁目 4-1)

現地実習：中山峠近郊 (予定)

4) プログラム (予定)

【12 月 18 日】

10:00~10:15 受付

10:15~17:00 開会式・講義

「降積雪と雪崩の基礎知識」(秋田谷英次：北の生活館・元北大低温研所長)

「積雪観測法」(尾関俊浩：北海道教育大学岩見沢校)

「雪崩危険斜面の判定・雪崩管理の実態」(町田誠：町田建設(株))

「北海道における道路管理上の雪崩対策」(池田保夫：(株)ドーコン)

「雪崩対策工の計画設計」(上石勲：(株)アルゴス)

「雪崩埋雪者の搜索救助」(樋口和生：NPO 法人北海道山岳活動サポート代表)

【12 月 19 日】

8:20~14:00 野外実習

「雪崩対策工見学」(車窓見学)

「積雪観測演習」(尾関俊浩ほか)

「雪崩探索と救助実習」(樋口和生ほか)

14:00~16:30 修了試験・閉会式(修了証授与)・移動

5) 申し込み

以下の URL ((社)日本雪氷学会雪崩分科会ホームページ) より開催案内兼申込書をダウンロードしてお使い下さい。申し込み〆切は 11 月 22 日 (水) です。定員 (40 名) になり次第、受付を〆切ります。

http://www.argos-net.co.jp/nadare_bunkakai/

6) 問い合わせ先

第 17 回日本雪氷学会雪崩対策の基礎技術研修会事務局 (E-mail:nadareken17@its-win.gr.jp)
研修会全般：(独)土木研究所寒地土木研究所 松澤 (Tel:011-841-1746, Fax:011-841-9747)
受付申込み：野外科学(株) 荒川・飯沼 (Tel:011-751-5152, Fax:011-748-3618)



■ 雪崩特集号について(第 2 報)

前号の Letter で機関誌「雪氷」の第 2 回雪崩特集号への投稿を呼びかけたところですが、その進捗状況をお伝えします。

(1) 「雪氷」のスケジュールについて

編集委員会と連絡を取っておりますが、他の特集号との関係で、雪崩特集号は少なくとも 2007 年度 5 月号以降の掲載予定と、時期が若干うしろにずれ込む予定です。

(2) 公募論文について

6 月末にお知らせした段階では、「原著論文については 2006 年 10 月末、それ以外については 11 月末までのご投稿」を呼びかけておりました。10 月 31 日現在、査読の入る原著論文(論文, 研究ノート, 速報)については未だ入稿がありません。11 月に入りますが、原著論文の募集を継続しておりますので、投稿を予定されているかたは雪崩特集号編集担当尾関“oze@iwa.hokkyodai.ac.jp”までご連絡ください。ぜひともこの機会にデータをまとめて「雪崩特集号」にご協力ください。また査読の入らない原稿については更に日程の余裕がありますので、写真館、新刊紹介、エッセー、談話室、報告、質問箱などへのご投稿をお待ちしております。講座、用語集など特集号の企画案についても募集しております。

投稿要領については「雪氷」1 月号の巻末か、日本雪氷学会のホームページ内“<http://www.seppyo.org/Members/eb1>”

で閲覧が可能ですのでご利用ください。原稿は電子投稿がたいへん便利です。また郵送の場合の送付先は「雪氷編集委員会」ですが、投稿時には編集担当まで、原稿の種類、題目と著者名をご連絡ください。

ご協力よろしく申し上げます。

2006 年 10 月 31 日

雪崩特集号 編集担当 尾関俊浩

■ 分科会費納入のお願い

今年度の雪崩分科会費を郵便振替で納入願います。金額は年額1,000円です。お手数ですが、郵便局の窓口において用紙を受け取り、必要事項をご記入の上、払い込み願います(氏名と何年度分の会費かをお書き下さい)。前年度までの会費に未納のある方は、あわせて納入願います。口座番号等は以下の通りです。

口座番号 : 00670-0-26949	口座名称 : 日本雪氷学会雪崩分科会
----------------------	--------------------

ご不明な点がありましたら会計担当幹事の山口悟までお問い合わせ下さい。連絡先は次の通りです。

郵便宛先 : 〒940-0821 新潟県長岡市栖吉町前山 187-16

防災科学技術研究所 雪氷防災研究センター

電話 : 0258-35-7522、ファックス : 0258-35-0020、eメール : yamasan@bosai.go.jp



■ 雪崩分科会役員

(役職)	(氏 名)	(所属)
会 長	西村 浩一	新潟大学 理学部
副会長	和泉 薫	新潟大学 災害復興科学センター
副会長	上石 勲	株式会社アルゴス 雪氷技術センター
監 事	川田 邦夫	富山大学 極東地域研究センター
幹事長	河島 克久	新潟大学 災害復興科学センター
幹事 (会計)	小杉 健二	(独) 防災科学技術研究所 雪氷防災研究センター 新庄支所
幹事 (会計/ML)	山口 悟	(独) 防災科学技術研究所 雪氷防災研究センター
幹事 (企画)	秋山 一弥	国土交通省 国土技術政策総合研究所
幹事 (企画)	飯田 肇	立山カルデラ砂防博物館
幹事 (企画)	中山 建生	日本勤労者山岳連盟
幹事 (企画)	町田 誠	町田建設株式会社
幹事 (企画)	松澤 勝	(独) 土木研究所 寒地土木研究所
幹事 (研究会)	竹内由香里	(独) 森林総合研究所 十日町試験地
幹事 (編集)	荒川 逸人	野外科学株式会社
幹事 (編集)	尾関 俊浩	北海道教育大学 岩見沢校
幹事 (HP)	池田 慎二	株式会社アルゴス 雪氷技術センター
顧 問	若林 隆三	アルプス雪崩研究所
顧 問	遠藤八十一	元 森林総合研究所 十日町試験地

※ HP : ホームページ、ML : メーリングリスト

雪崩分科会ホームページ : http://www.argos-net.co.jp/nadare_bunkakai/

(社) 日本雪氷学会 雪崩分科会事務局	〒950-2181 新潟市五十嵐2の町 8050 新潟大学 災害復興科学センター 河島 克久 電話 : 025-262-7056 FAX : 025-262-7050 E-mail : kawasima@cc.niigata-u.ac.jp
編集担当	〒065-0043 札幌市東区苗穂町 12 丁目 2-39 野外科学株式会社 技術部 荒川 逸人 電話 : 011-751-5152 FAX:011-748-3618 E-mail : h.arakawa@yagai.co.jp